左：掛川市上垂木　　右：袋井市長溝

先人の知恵に学ぶ風土と住まい

遠州地方に古くから、北西側に通称お蔵と呼ばれる土蔵造による物置と母屋（多くは農家住宅）そして、槙による垣根（生垣）で囲われた屋敷（敷地）が見られる。小さいころから見慣れた風景である。最近は家の建替えが行われて、老朽化したお蔵は取り壊され、生垣はフェンスになり、ずいぶん様変わりしたが、まだところどころにその風景は存在する。

■自然との付き合い

古来より日本人は自然と上手に付き合ってきた。生きていること自体が自然であるという考え方が根本にあり、建物（というよりは住まい）も自然界にある木、土、紙、いぐさなど有機素材を上手に利用してきた。これは手に入りやすいということばかりではなく、自然と上手に付き合う知恵でもあった。

木は軽く加工が簡単であり、地震の多い日本では軽いことが利点であったが、一方では土を焼いた重い瓦で屋根を葺くことで、台風の強風でも飛ばされないように工夫した。また、湿気の多い日本では紙の透湿性が障子に生かされ、湿気容積の大きい土を壁に使うことで、断熱遮音に対応し、水に濡れたらどうしようもない畳をあえて床に使うことで水との絶縁を意味した。床も高床式にして浸水の被害を食い止めようとした。

これらは、外国の石造文化とは違う日本の伝統建築文化である。自然をうまく取り入れることで上手に付き合ってきた。これこそ、今流行のエコの極みではないだろうか。

■家相学からの教え

よく住宅の間取りに、家相をいう場合がある。長い歴史に裏打ちされた統計に基づいたものだといわれるが、古来の住宅様式にあてはめてみると、その意味がわかる。

水まわりは鬼門（丑寅＝艮）が凶といわれる。昔の下水はドブといわれる貯め枡に流しそれから放流した。この地方では雨の降るときは東北方向から湿気を含んだ風が吹く。このため梅雨の時期や雨の日にそのドブを渡る空気が家の中に入るのを嫌ったからである。玄関は、東南（辰巳＝巽）の方向が吉といわれる。これは太陽の昇る方向を指し、明るい陽光とお金（財産）が家に入るようにとの願いからであるが、もうひとつこれと反対の方向、すなわち北西（戌亥＝乾）の方向も諸般に吉といわれる。この巽と乾を結んだ線を金庫線と呼び財産が通り抜ける道といわれている。この金庫線の延長線上に財産を収納する建物（収蔵庫）を配置して財産を蓄積しようとしたのである。

このように全てに理にかなった統計学であり、決して侮ってはいけないものである。

■知恵

現代でもそうであるが、火災は怖いものの一番に挙げられている。今のような消防体制や設備がなかった昔は特に恐れられていた。特に冬のこの地方に吹く西からのカラッ風に乗ってくる火災は、防ぎようもなく恐怖であった。

そこで土蔵造の建物を西に配置することで火の粉を防ごうとしたのは自然ではないだろうか。財産を火災から守り、さらに延焼も防ごうとした先人の知恵である。また、槙の木は非常に水分の多い木であり、少しくらい火の粉を被っても来年は青々とした芽を吹く木である。これを敷地の周囲に植え垣根を作ることによって、火災の難からの被害を食い止めようとしたことも想像がつく。

■そこにしかない風景

このような風土に対応した知恵によって、お蔵と槙囲いの風景ができあがったのではないだろうか。そしてこの風景が、ひとつの形として、また集団としての景観を形成していたのである。これはこの地方独特の文化であり、自然に溶け込むやすらぎとしての景観ではないだろうか。伝統を踏まえつつそこに一番ふさわしい、自然と一体となった景観作りに貢献したいと思う。

（静岡県建築士会副会長　原田清司）